

普及活動の成果

様式6(左)

課題名 : 加工用たまねぎの単収向上対策
活動対象 : 加工用たまねぎ生産者

振興局名 : 県北振興局
実施期間 : 平成29年4月～平成30年3月

【対象の概要】

佐世保市、平戸市、松浦市および佐々町の加工用たまねぎ生産者で構成される各生産部会。
農家戸数 : 42戸 (うち認定農業者 19名)

【課題設定の背景】

県北地域では加工業務用野菜として複数の品目の振興に取り組んだ。その結果、「たまねぎ」については、平戸市、松浦市および佐々町において面積が拡大したが、排水不良、べと病の発生および新規栽培者の増加等から単収は低い(平成27年産 県北 : 4.3トン、県平均 : 5.3トン)。

【活動目標】

県北地域の「加工用たまねぎ」の単収向上を目的として、圃場の排水対策(暗渠、明渠、高畝、稲刈り後の排水溝設置等)、生産者の栽培技術(土作り、育苗管理、適正施肥、適期定植、栽培管理)ならびに病害虫・雑草対策技術の向上を図る。

べと病等の重要病害虫対策については、生産者が地域一体となって取り組む意識の向上を図るとともに防除を適期に行うための情報提供を行う。

作付け推進を行い、新規栽培者の確保および既存栽培者の作付け拡大を図る。

【関係機関との連携(活動体制・役割分担)】

県北地域加工業務用産地育成協議会産地部会と連携し、産地部会担当者会(市町、JA、振興局)の開催を支援した。展示圃については技術普及班、農林技術開発センターならびに農機メーカーと連携し、展示圃内容の検討、機械の実演会および講習会の開催を支援した。

【活動経過】

(1) 指導チーム会支援

市町、JA、振興局によるたまねぎ担当者会を開催し、指導内容や展示圃内容について検討した。また、生産者に対し、栽培状況を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。アンケート調査結果等も踏まえ、H30年産では適期定植、排水対策、土作りを特に重点的に指導した。

農機メーカー、農林技術開発センター、技術普及班と連携し、明渠による排水対策と畦たて同時マルチ処理による省力化に関する展示圃を設置した。また、上記関係機関の協力の下、溝堀機実演会、土づくり講習会および畦たて同時マルチ実演会を開催した。

生産者の交流並びに生産技術の高位平準化を図るため、県北地域全体の部会を対象とした現地検討会およびたまねぎ病害対策研修会を開催した。



(2) 栽培管理指導

JA、各地の生産部会と連携した育苗講習会や現地検討会の開催、個別巡回による栽培管理・病害虫防除

指導および土壌分析による施肥指導を行った。

べと病対策については、定点調査圃を佐々町と平戸市の2箇所に設置し、月2回の調査を行った。ハガキを用いて、たまねぎの生産者全戸に県下一斉防除の実施を呼びかけた。

携帯電話のメールを利用した「たまねぎ通信」により排水対策、台風後の対策、病害虫発生状況や防除等について情報提供を行った。

(3) 作付け推進検討

加工用たまねぎを含めた県北地域の露地野菜振興方策を検討するための担当者会を開催し、推進対象や方法を検討した。壱岐市において先進事例調査を行い、法人で野菜栽培を行っている事例を調査した。

【普及活動の成果】

(1) 単収向上

H29年産のべと病の第一次感染株の発見は早かったものの、発病株の抜き取りや適期防除により発生は抑えられた。しかし、定植時期に降雨が続き定植が遅れたことと、4月下旬~5月の降水量が少なく玉肥大が進まなかったこと等から単収は伸び悩んだ（JA報告：2.1t/10a）。

展示圃では水稲収穫後の排水対策と、マルチ被覆により適期に定植することができた（11月下旬）。また、生産者の排水対策への取組意識が向上し、H30産では明渠の設置、溝きり、溝と排水溝との連結等の対策がされている圃場が多く見られた。

(2) 面積拡大

H30年産では台風により苗不足となる圃場もあったが、定植予定面積の約64%が年内定植、95%が1月末までに定植できた。H30年産面積見込み：19.7ha（前年比24%増）

【対象の声】

講習会内容や資料等は役立っている。

栽培管理、病害虫対策に関する質問等へすぐに回答してもらえるので助かっている。

【今後の課題】

べと病については、気象条件によっては発生が拡大し、H28年産のような被害がでる恐れがあるため、べと病の定点調査の情報をもとに、現地検討会での病害防除対策やたまねぎ通信による適期防除を呼びかけ、地域一体となった防除を行う。

4月~5月に少雨となり、玉肥大が進まないような気象の時には、畦間への水はり等の対策を臨機応変に指導する。

H29年産は10月から12月の天候に恵まれたことから、定植準備が順調にできた。しかし例年この時期には天候不順となることが多いため、引き続き稲刈り後の明渠設置の効果の検証を行う。

定植時の苗の不揃い等から補植が必要な圃場があったこと、また生産者自身も育苗について課題があると感じていることから広域での現地検討会の開催等、生産者同士の交流を促進しながら今後も指導チーム会を開催し、関係機関が連携した産地支援を行い、生産者の技術向上を図る。

【成果の活用及び普及活動上の留意点】

展示圃については、関係機関と連携し、生育調査・収量調査を行い、県北地域でのマルチ栽培の普及性を検討する。

たまねぎ通信については、生産者に速やかに情報を伝える有効な手段であるが、まだ登録者も栽培者の約半数であること、携帯電話の設定状況によっては登録していても届かないこともあるため、JAとも連携し、携帯電話の情報をプリントアウトした後、購買店等に張り出す等情報の周知について検討する。

【発表・参考資料】 なし